

図1 「自求自探 五箇条」

一、よく観察せよ

- 物事をじっくり観察し、課題を発見しよう。
- 現状はどのようにになっているか、どのような問題が潜んでいるかを正確に把握するための第一歩は「観察」である。

二、常識を学べ

- まずは世間で「常識」と言われていることが何であるかを知ろう。
- その上で、「常識」にとらわれず、あえて別の見方をしてみよう。そこに問題解決の突破口がある。

三、自ら考え挑戦せよ

- 予測不能な時代であることを念頭に、自分で考える意識を持とう。
- 探究活動に正解は存在しない。
- まずはアイデアを数多く出してみよう。
- アイデアを言える勇気を持とう。
- みんなが意見を言える雰囲気づくりを心がけよう。

四、粘り強く取り組み

- すぐに答えが出せる、取り組めるものは、根本的な解決ではないと心得ておこう。
- これからも皆さんが直面するであろう課題は、一朝一夕に解決できるようなものはほとんどない。
- 挑戦→失敗→反省→新しい挑戦→失敗→反省……の先に突破口がある。
- 失敗してあたり前、失敗から学ぼうとする姿勢を身につけよう。

五、ともに楽しむ

- どんなに博識でも、人間のものの見方には限りがある。
- 他の人たちの意見に耳を傾けよう。
- 一見、受け入れがたい、驚くような内容も、よく話を聞けば、新たなものの見方の獲得につながる。
- 様々なものの見方を身につけることで、様々な立場に立て物事を考える想像力が身につく。

同校が視察した京都府・京都市立堀川高校の「探究五箇条」を基に作成した。
※学校資料を基に編集部で作成。

げた。委員が手分けをして、先進校を視察したり、校外研修に参加したりして、探究学習についての理解を深めるとともに、探究学習を通じて育成を目指す資質・能力として、「自求自探の五箇条」を策定(図1)。カリキュラムは、1年次は、問いの立て方やプレゼンテーションの方法など、探究に必要なスキルを学び、2年次は、ゼミに分かれて探究学習を行う内容とし、オリジナルのテキストも作成した。

そして、20年度は、全校実施に先駆けて、探究推進委員の小澤良太郎先生が担任を務める特進クラス(全2クラス)で、LHRの時

間に探究学習を始めた。先行授業の目的は、探究学習の指導が未経験の教師でも授業が行える方法を探ることであった。

「私と、探究学習の指導経験がないもう1クラスの担任とで、情報共有をしながら授業を進め、クラス間で大きな差が出ない授業を行うためには、どの程度の枠組みがあればいいのかを確認しました。その結果、共通の指導案やテキストがあれば、授業前の打ち合わせに時間をかけなくても、教師がそれぞれの個性を生かして、時間内に必要な活動ができることが分かりました」(小澤先生)

さらに、先行授業での生徒の発言や様子を踏まえて、「この課題に取り組む前に、調べ学習を行った方がよい」などと、活動の順序を入れ替えたり、活動を追加したりして、年間指導計画やテキストを改訂していった。

チーム・ティーチングに向けて、「探究メンバー」を編成

21年度には、探究学習をテーマとした校内研修を実施した。総合探究の授業は、担任ともう1人の教師によるチーム・ティーチング(以下、TT)で行うことにしたため、1学年10クラスを担当する20人の教師が探究学習の指導を行えるようにする必要があった。そこで、探究推進委員会は、管理職と相談し、22年度に総合探究を担当する中堅・若手教師に声をかけ、生徒の探究をファシリテートする「探究メンバー」として位置づけ、ともに準備を進めることにした。約2か月に1回、特進クラスの先行授業を見学したり、模擬授業を行ったりしてスキルアップを図った。

研修の場では、若手教師が発言しやすい雰囲気づくりに努めたと、金子先生は語る。

「先生方には、教職歴や経験にかかわらず、率直にアイデアを出し合い、みんなで新しい授業をつくっていきましようと呼びかけまし

た。グループワークを3〜4人の少人数のグループで実施したところ、感じたことや自身の授業を基にした指導のアイデアなど、積極的に発言する若手教師の姿が見られ、活発な意見交換ができました」

普段あまり接点のない他学年の教師同士が一緒に行った研修は、教師にとつての探究の場だったと、小澤先生は語る。

「経験の浅い探究学習の指導について意見を述べ合うことで、互いの考えを理解し、自分たちはよりよい探究学習をつくらうとしているのだと、多くの教師が感じました」と

授業での教師の留意点をまとめ、学年全体で共有

そうした3年間の準備を経て、22年度、1学年の全クラスで総合探究を始めた。研修を受けていない教師が1学年の担任となった場合は、探究推進委員が探究メンバーをT2につけたことで、「一緒に準備ができるので心強い」「互いに自分にはない発想を学べる」といった声が上がっている。また、「探究学習での教師の役割と、授業で意識すること」をまとめて、教師間で共有した(図2)。

1学年のカリキュラムは、10月まではオリジナルのテキストで探究のスキルを磨き、11月からは6つの企業から出された販売促進や新企画にかかわる課題に、3〜5人のグループで取り組み、その成果を3学期に発表するというものだ(図3)。

一連の活動の中で、生徒の違った一面を見ることも少なくないと、榎本先生は言う。

「教科の授業ではあまり発言しない生徒が、総合探究の授業で、プレゼンテーションの資料を緻密に作り込んだり、生き生きと発表したりする姿が見られています。そうしたクラスメートの姿に刺激を受けて、『自

図2 探究学習での教師の役割と、授業で意識すること(抜粋)

- **授業を進めるのは生徒。教師はアドバイザー的な役割**
教師は教える立場ではなく、生徒たちが活発に意見を言える雰囲気づくりをするよう努める。
- **「分かりません」は、NGと言い続ける**
答えがない問題に対して挑戦する生徒たちを後押しする。
- **生徒たちが取り組む時間を意識した授業計画を**
生徒たちが話し合う時間を設定し、その時間内で何かしらの意見や結論を出せるようにする。
- **生徒よりも話す時間を短くする**
教師は問題提起などの説明にとどめ、話し合いはできるだけ生徒たちで行わせる。教師が話してはいけないということではない。
- **生徒の発言を否定しない**
せっかく発言しても、否定されると発言する気を無くす。明らかに間違った意見であったとしても、意欲があって発言した場合には、発言した行為や努力を褒める。考え方や答えを訂正する時は、授業中ではなく、個人的に話をするのがよい。

※学校資料を基に編集部で作成。



探究推進委員長、国語科主任
金子美保 かねこ みほ
教職歴22年。同校に赴任して23年目。国語科。



高1学年主任、探究推進委員
榎本俊介 えのもと しゅんすけ
教職歴18年。同校に赴任して14年目。生徒指導部。地理歴史・公民科(日本史)。



英語科主任、探究推進委員
小澤良太郎 おざわりょうたろう
教職歴20年。同校に赴任して15年目。教務部・特進委員。英語科。



中3学年副主任、探究推進委員
山田秀行 やまだ ひでゆき
教職歴17年。同校に赴任して13年目。進路学習部。数学科。

分もこうしたい』などと、積極的に発言する生徒が増えています」

23年1月には、クラス内でグループ発表を行い、生徒の投票によって1〜2グループをクラス代表として選出。2月には、最大20グループで学年発表を行う。

そして、23年度の2学年では、13〜15のゼミを設け、生徒それぞれが取り組みたいテーマに応じてゼミを選択。クラス横断でグループをつくり、「探究ナビBasic」(※1)を活用しながら探究学習を進める計画だ。

*1 ベネッセの教材の1つで、楽しくて分かりやすい説明ステップに沿って、生徒が探究を体験し、前向きに探究の基礎スキルを身につけることができる教材。

変革の成果・展望

探究学習の指導経験を部活動の指導に生かす

特進クラスで先行授業を行った学年は、22年度に3年生となり、探究学習に2年間取り組んだ成果が出ている。例えば、進路学習で発表を行った際、2年生までは普通クラスだった生徒の発表資料が、インターネット上の画像をまとめただけのものだったのに対し、特進クラスのある生徒は、自分の希望進路である法学部の知識と、自身が関心を持つ放送規

図3 1学年の「総合的な探究の時間」のカリキュラム

学期	探究とは
1学期	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動に必要なスキルの修得 観察力を鍛える、探究の5箇条 振り返りの重要性、振り返りの仕方、探究活動の評価について 対話の訓練、ツッコミ力、フェルミ推定、I F力 1学期の振り返り
2学期	<ul style="list-style-type: none"> 2学期の流れを説明 夏季休業中の課題の確認・発表 キーワードの掘り下げ方 企業インターンワークについての説明
3学期	<ul style="list-style-type: none"> グループで、企業から出された課題に取り組む 2学期の振り返り グループで、企業から出された課題に取り組む グループ活動の結果をクラスで発表 学年全体で発表

※2年次に向けたガイダンス

※学校資料を基に編集部で作成。

制について組み合わせた資料を作成し、より深みのある発表を行っていた。

「2年間の先行授業では、教師は、『別の視点はないか』『ほかにも調べたか』などと、テーマを深く掘り下げさせたり、視野を広げさせたりする声かけをしてきました。そうしたことによつて、探究の質を高めるためには何が必要なのか、生徒が自ら考えるようになりました」（小澤先生）

教師も、探究学習での経験をほかの教育活動に生かしている。探究推進委員の山田秀行先生は、顧問を務めるテニス部で、部員が話し合つて練習内容を決めるようにした。

「以前は、先輩から代々伝わる練習を中心に取り組んでいましたが、22年度から、試合前のウォームアップなどを部員が考える場を設けました。すると、練習の意味や効率を考えた、議論したりするようになりました。その結果、より熱心に、より集中して練習に取り組むようになり、成果を上げています」

課題は、振り返りの簡素化と全教師の意識改革

今後の課題は、振り返りの改善だ。現在は、

「授業でうまくいったこと」「自身の変化」「グループでの他者評価」などを、自由に記述する振り返りシートと、「洞察力」「理解力」「挑戦力」などの6項目についての自己評価を「Class」(*2)に入力する振り返りを毎授業行っている。それらと同じ項目で教師が生徒を評価し、双方を反映したリフレクションシートを学期に1回作成しているが、その方法では振り返りに多くの時間を要する点が課題となっている。そこで、選択形式で回答・集計ができる「Class」の振り返りに一本化するなど、簡素化する方向で検討している。

また、探究学習の指導が未経験の教師が、今後1・2学年の担任を受け持つことを見据えて、探究学習の意義を浸透させていくことにも力を入れている。

「総合探究の指導経験者と未経験者を組み合わせるITTにおいて、未経験者が戸惑いなく指導できるようにし、指導を継承していきたいと考えています。また、2学年の総合探究では、担当となった教師の専門性や興味・関心に応じたゼミを設けるなど、学年の状況に応じてゼミの内容を変えることも検討中です。探究推進委員が一方的に主導するだけでは、教師の意欲は高まりません。持続可能な取り組みになるよう、教師のやりがいを高める方法を模索していきます」（金子先生）

*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。